

(8) ハルヒカリまで -おいしいパン でも経済性・作りやすさが！-

北海道では、明治以前から小麦の栽培が行われていましたが、広く栽培されるようになったのは、明治4年以降の開拓使による、アメリカ合衆国からの種子の導入に始まります。北海道の小麦は、府県産に比べて硬質でタンパク含量が高く、パンの原料として優れることから、開拓使はこの良質小麦の栽培を大いに奨励しました。

北海道では、秋まきと春まき小麦が栽培されていますが、春まき小麦について、「ハルヒカリ」までの代表的な品種について振り返ってみましょう。

明治時代、春まき小麦は早くから開拓者の間で広まっていた「札幌春小麦」(明治38年優良品種)が広く栽培されていました。来歴は不明で、おそらく外国種と国内産種との交雑で、札幌周辺の農家により、北海道に適應するものが選抜されたと考えられています。

大正時代に入ってから第1次世界大戦の影響、水田の拡張や赤さび病の被害の増大なども重なって、小麦の作付面積は大巾に減少しました。大正6年から本格的な交雑育種による品種改良が開始され、春まき小麦では、昭和5年に「農林3号」が育成されました。

この「農林3号」は、当時被害の大きかった、赤さび病に抵抗性の「ベロツルカ」(デュラム小麦)と、「札幌春小麦」(普通小麦)との交雑から育成され、染色体の数が異なる種間交雑から、実用品種の育成に成功した、世界で初めての品種として高く評価されたようです。赤さび病、黒さび病に強く、多収でタンパク含量も当時のカナダ産に劣らず、一時は市場で大いに歓迎されましたが、タンパクの質が、パン用に不適との欠点や、晩生で稈長が高く、倒伏し易いことなどから、作付面積の拡大には至りませんでした。

昭和に入ってから、戦時経済の食糧増産政策の影響を受けて、小麦の作付面積は全道的に異常な増加を示し、肥料事情の悪化も伴って、春まき小麦の作付が増加しました。昭和13年には「農林29号」が育成されました。

この「農林29号」は、「農林3号」より早生、短稈で倒伏の発生が少なく、多収で赤さび病にも抵抗性の品種でした。この品種は、他の硬質の春ま

き小麦品種とは異なり、中間質の小麦で、耐病・多収の短稈品種が求められていた量産時代のもので、品質をある程度犠牲にした品種でした。しかし、昭和40年に「ハルヒカリ」が育成されるまで、長い間春まき小麦の基幹品種として広く栽培され、春まき小麦栽培の安定化に大きく貢献しました。また、同年にパン用の春まき硬質小麦として、「農林35号」が育成されました。

この品種は、カナダ小麦と同等の良質小麦で、国内産小麦では最高の品質を有していましたが、収量性が低く広く普及するされるには至りませんでした。

戦後、雑穀統制が撤廃され、小麦の作付面積は急激に減少し、短強稈・多収の画期的な秋まき小麦品種「ホクエイ」の出現と、肥料事情の好転による秋まき小麦の作付け増加などにより、春まき小麦は数パーセントの作付けに急減しました。品種育成はこれまでの量産時代から、品質に重点がおかれ、昭和40年にはパン用良質の「ハルヒカリ」が育成されました。

この「ハルヒカリ」は強力小麦の銘柄指定を受け、他の品種よりも價格的に有利に取り扱われたため、春まき小麦の作付け面積をほぼ独占しましたが、倒伏に弱く低収性のため、作付け面積は限られていました。しかし、昭和48年からの麦生産振興対策、昭和53年からの水田利用再編対策により、小麦の作付け面積が急増し、従来 of 小麦主産地（道東）に加え、道央の稲作地帯での作付けが増加し、転作初年目に春まき小麦が栽培されるようになりました。そのため、稲作転換の一時的な現象とはいえ、全道の小麦作付け面積の10～20%に増加しましたが、低収性のため秋まき小麦に代わって、ある程度輪作体系に組み込めるだけの作物として安定してはいませんでした。

<土屋 俊雄>



出穂前のハルヒカリ（左）とハルユタカ（右）